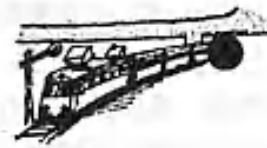


新幹線車中

My Order and Disorder



水上 龍郎

原則として、最近の毎月第3土曜日は大阪が私のはたらき場所となる。言わずと知れた大阪工業英語研究会の学習フォーラムに出席するためだが、その<通勤>には、往復とも東海道新幹線「のぞみ」号を利用している。復の方は、自他双方のさまざまな理由により、新大阪駅での最大乗車時間幅は数時間にもおよんで、まったく一定していない。しかし、往の方は、東京発午前6:00が90%以上、残りの僅々10%が同6:07か同6:56で、この1時間帯を逸らすと大阪での始業ベル(10:00)には間に合わない。

先にく最近>とことわったのは、それ以前の、すなわち1977~1993年ころまでの利用交通手段が、やむを得ない場合をのぞき、ほとんど空の便であったからだ。鉄道に切り替わったときの契機が何であったか、今ではつまびらかでない。あえて言えば、当時までほぼ15年間だまされて乗っていた航空機というものが無性に怖くなったというのが本音であろうか。

「だまされて」とは変な言い草だが、私自身は中学1年生のとき信濃と甲斐の国境に連なる八ヶ岳(標高2,899m)の難所横岳で不運にも滑落(と言ってもほんの数メートルだが)した経験がある。そのとき以来、二次性徴としての高所恐怖症が体内に巣く、低きは駅のプラットフォームから始まって、高きは建物の2階以上、灯台の物見台、吊り橋、ロープウェイなどの高所という高所に異常な感覚をもつようになった。

いわんや、雲の中や上を飛びまわる巨大な金属物体に乗るなどということは、私の人生では断固としてご法度であった。それが、だれかにだまされたのである。「人間が一番怖いと感じる高さはマンションの8階ぐらい、高度何千メートルでは通常の高所恐怖症は消えてしまうから安心しなさい」と託宣されたのだ。私はこの言葉を信じ、以後15年間にわたって自分に暗示がかかっているとばかりに、他人様には何事もないようなふりをして飛行機に乗り続け、ニューヨークへもデンバーへも空を旅した。

話を元にもどすと、この自己暗示が解けた結果として、鉄道に乗り替えたというのが理由であったろう。それに、ちょうどそのころ、陸側では東京~大阪間の乗車時間を30分も短縮した「のぞみ」の運用が開始されたこと、空側では羽田空港が新しくなって自宅から4キロも遠くなり、従来よりアクセスが困難になったこと、この二つの事実が私の<変節ぶり>をうまく説明してくれるようだ。

さて、東京駅発午前6:00の「のぞみ」である。この列車に乗るため発車10分前までに東京駅に到着するには、自宅を4時30分には出なければならない。これは、車を利用して電車を利用してもだいたい同じになる。車の場合は、早朝のタクシーをつかまえるのにかなりの余裕時間をみななければならないし、また電車の場合は早朝であるため運転間隔時間を無視すると一

挙に15分から20分程度の待ち時間が必要になるからだ。春から秋にかけての早朝は、雨模様でない限り、むしろ快適であるといえるが、その他の季節では、多少大げさな表現になるけれども、それは寒さと暗さへの挑戦である。ただし、いざ出陣のかまえさえ確固たるものがあれば、家族を含めて他人様が想像するほどつらくはない。

無事東京駅に着くと、その時点から私の決めごとが始まる。まず、サンドイッチとオレンジジュースを買う。サンドイッチは、新幹線改札口に入る前までは500円のものがあるが、プラットホームでは700円になる。ジュースは、自販機で買えば場所を問わず110円だが、ホームの売店では200円の高いものしかない。私は、ここで $700+200=900$ （円）という算術計算で当日の朝食をあがなうのであるが、これは決して＜高級志向＞ではなく、以前2、3回ほどケチって $500+110=610$ 円ですませたところ、すべてツキに見放されたという体験が残像として居座り、ジンスミみたいな形でこだわっている習慣に過ぎない。その体験も、乗車して自分の席に行ったら、隣と周辺にこわもてのお兄さんたちが座っていたとか、降車の際に読みかけの書籍を置き忘れてしまったとか、偶然にしてまことに愚かなたぐいである。

いよいよ6:00がきて、新大阪までジャスト2時間30分の旅が始まる。この列車は、毎日初発の、主としてビジネスマンを対象とした下り列車で、途中停車駅は東海地方完全無視型の、新横浜だけ。列車に乗った私の第一の戒律は、サンドイッチとジュースを、必ず新横浜駅に到着する前に片づけてしまうこと。その間、ちょうど15分、文庫本を片手にゆっくり賞味して格好の時間である。次は、6:20から睡眠に入るこ

と。朝食を終え、容器をビニール袋に納め、エキストラライトを一服すると、このシーケンスの第2段階として睡眠がやってこなければならぬのである。これも、そうなるようにあらかじめ自己暗示をかけてあるので（プリプログラムされているので）自然の流れとして眠るのであり、眠ろうとして眠るのではない。

ちなみに、私は通常の（夜の）睡眠時間が短いせいか、自分で判断して許される時間がくれば、プログラムの一環でなくても、ある前提条件さえ成立すれば、直ちに眠ることができる。たとえば、会社の昼休みだったら、ソファ（なければ、仕事机の椅子でもよい）に深く腰を埋め、真ん中のページで見開きにした英字新聞を顔の上にかぶせる（日本語の新聞は活字を読もうとするのでだめ）、またバスや電車の座席だったら、かばんを膝上に正しく立てて置き、その上に両腕を行儀よくかすがいに載せる、などの条件を満足させることによって、予定した時間（下車までの時間）だけを間違わずに睡眠に当てることができる。

目覚めはシーケンスの第3段階、関ヶ原通過の最中で8:00前後である。これで、昨夜来の寝不足があっても完全に解消する。京都駅通過が8:15ころ。左手にひときわ目立って重厚な姿を見せる東寺の五重塔を車内から拝観する。この最終段階の＜行事＞が完了すると、不思議に頭がすっきりしてくる。（右手には、東本願寺の伽藍を近望でき、また銀閣寺の五重塔も遠望できるが、こちらは時によって省略しても、東寺を確かめておかないと、何か思わしくないことが起こる可能性があると感じているから、何ともおかしい。）残り10分間で、乗車してから2本目のシガレットをくゆらしつつ、テキストを開いて当日の講義のポ

イントを再確認する。

かくして、8:30 新大阪で無事降車となるのであるが、他の 6 時台 2 本の「のぞみ」でも私の振る舞いは同工異曲で、ただ各地の記載時間が発車時刻の遅れる分ずれるだけである。

列車による会場遅刻は 2 回ばかりある。名古屋あたりまでの晴天が、関ヶ原で雪空に変わって例の徐行運転を強いられたときに発生した。それでも、航空機による遅れに比べると、最長遅延時間でも 30~40 分程度だったと記憶している。(空の場合は、一度 1 時間 30 分もの遅刻をしたことがある。羽田発のジャンボが車輪から煙を出したまま飛行し、伊丹でそのまま着陸できず、ランディングギア部の着地時写真確認のため、大阪湾上空を 3 回ほど旋回したための遅れである。)

新大阪までの新幹線では、上記のような遅れはあるにしても、他はきわめて日常的で変わり映えしない。また、それでなければ困るのである。

帰りの列車では、たまに飲酒のいたずらで変事の起こることもある。ある年末、忘年会の後の最終東京行き「ひかり」号で、京都から私の隣席に 22、3 才の青年が座った。清潔な風貌の青年で、礼儀も正しかった。発車後まもなく彼の読み出した本を盗み見ると、岩波クラシックスの『福翁自伝』である。私はたちまち彼に好意をもってしまった。めずらしく缶ビールを 4、5 本もっていた私は(ひとり旅での車中飲酒は過去に一度もない)、忘年会の余波をかって読書中の青年に話しかけ、ついにはビールも飲ませたしまったのである。話がはずむうちに、出身が山陰の田舎で、東京のある

国立大学に横浜から通っている苦学生であることもわかった。私たちは、ビールをちびちびやりながら、年令の差を忘れて、諭吉の生涯や大学のあるべき姿などを熱心に話し合ったような気がする。そして、彼は自分の降りるべき新横浜では下車せず、東京の友人の家に泊めてもらうということで、ついに東京駅まで同行してしまった。さて、ここまでは、時にあってもよい話である。旅は道連れの一好例であろう。

東京駅に着いた。私は、列車の中での別れ際に、それがあたかも私として当然の行為であるかのごとく、その日講義謝礼としていただいた袋の中から一万円札 3 枚そつと抜き出して青年に渡し、本代の足しにしてくれれば幸いだ、というような言葉をかけたのである。君の前途多難な人生に力を貸したいのだ、とのく義挙>に出たわけである。青年は躊躇しながらも受け取ってくれ、感謝の言葉が何度も返ってきた。名前を訊かれたが、まあまあで明らかにはしなかった。もちろん、私も青年の名を尋ねることはなく、さわやかに握手して、別れた。そして自分の心に快哉を叫んだ—これを一度したかった!

しかし、意気揚々と帰宅して妻にこの義挙を報告したとたんに戻された言葉は意外だった。彼女のキーワードは「おばかさん」「お人好し」「むだ使い」「分を心得ず」などなどである。言われて見れば、そのとおり、とんだアナクロだったか、と一時は下げたが、こんないいことをしたのにそれがわからないとはお前もお前だ、と最後は一変して不機嫌になったものである。でも、落ちは良くなかったが、新幹線でのちょっとした美談(?)として、私は今思い出しても、限りなくくすぐったく、限りなく誇らしいのである。